序君峰永位五從官記書縣

著編士散江駿補校史仙泥

飯坂温泉

四季之友

特49
347
No 20900/22
東京帝國大學圖書館 TOKYO IMPERIAL UNIVERSITY LIBRARY

○序

駿江散士ハ余ノ詩友ナリ、余一詩ヲ得レバ則チ散士ニ質シ、散士一文ヲ得レバ之ヲ余ニ質ス、蓋シ互ニ所長ヲ交換シ以テ相補フナリ、散士頃日飯坂溫泉四季ノ友ト題スル一著ヲ袖ニシ、來リテ益ヲ余ニ求ム、余敢テ辭セズ、取テ之ヲ閲スルニ、飯坂鑛泉及ビ其近地ノ名所舊跡ヲ叙シ、以テ浴客ノ爲メニシ、併セテ飯坂ノ爲メニスルモノナリ、余是ニ於テカ漫リニ校補ノ勞ヲ取リ、遂ニ此篇ヲ作爲ス、蓋シ福島縣下鑛泉ノ多キ、全國無比、其

ノ箱根伊香保ニ角逐スルニ足ルベキモノ、亦タ少キニアラズト雖モ、帝都ノ浴客多ク輻輳スル「ナク、唯ダ野夫田郎ノ遊浴場ヲ以テ甘ゼザルヲ得ザル所以ノモノハ、一ニハ其ノ名ノ知ラレザルト、一ニハ地ノ遠キニアリ、今ヤ瀛車開通シ、地ノ遠キハ之ヲ除ケリ、然レモ未ダ其名ノ聞フルナシ、是レ鑛泉業ニ從事スルモノ注意セサルベカラサル所トス當業者眞ニ能ク其ノ名ヲ公告スルニ努メバ、浴客ノ數ハ忽チ倍シ、其ノ客種亦タ上等トナルヤ疑ナシ、之ヲ爲サント欲セバ此種ノ書ヲ世ニ

配布シテ、以テ其實際ヲ告知スルニ在リ、散士ノ此書ヲ編ム、其ノ本意茲ニ在ル乎、然ラバ則チ此書僅々タル小冊子ト雖モ、其ノ効力ニ至テハ、福島鑛泉繁榮ノ媒介者タルベシ、余何ゾ飯坂ノ爲メニ、其將來ノ隆盛ヲ祝セサルヲ得ンヤ、

明治二十二年七月連日ノ炎暑ヲ椽先ニ避テ

東京　陸沈仙史識

飯坂雜詠。次近藤石城詞契芳韻。兼似駿江散士
法月君。併祈嚴正。

友人　田　資行　未定

避暑山村興不孤。夢醒呼酒醉呼茶。西風帶雨冷於水重嶺
攢峰看欲無。
蕭條小徑夕陽斜。遙認炊烟三兩家。浴餘酒前無一事樓頭
立盡數歸鴉。
雲影舒還卷。山容幾變遷。江村音景在。雨裡與風前。對山杯
可喚。聽水又宜眠。江閣無人訪。閒雲繞榛簷。山色風烟淡。閑

傾凹字杯。幽溪魚潑溂。青嶺雨將來。前林沛然雨。洗盡午時
炎。嵐氣封樓後。水烟橫細簾。多謝靈泉効。驪山不足推。浴餘
吟骨爽。奇景入詩來。山容兼水色。山水兩清靈。夜雨吟心冷。
峰巒入夢青。秋近蟲吟咽。地齒山水清。芒鞋攀岩角。竹杖踏
雲行。

余曩者。與京人陸沈仙史。同遊飯坂。相偕約作一詩。既而
仙史詩先成。余未能得隻句。却此著成矣。唯以塞其責耳。
然近比資行君太田雅伯。賦此詩。以似余。余之喜可知也。
窈窕佳什。篇々完璧。更無次韻雜澁之態。何等筆力。余今

評君詩以黃絹幼婦之四字不知非邪。

於右奥州客舍　駿江散士漫批多罪

目次

飯坂の位置……一丁
飯坂の地理……二丁
鑛泉……五丁
鯖湖湯……六丁
滝の湯……十丁
其他……十丁
泉質……十一丁
春……十五丁
夏……十六丁
秋　冬……十八丁
名所舊跡……十九丁

瑠璃光山醫王寺の什物……二十丁
詩……二十七丁

飯坂温泉 四季の友

東京　陸沈仙史　校閲
静岡　駿江散士　編著

飯坂の位置

鬼そみけりと云ふいまこと云ひけん未開の頃とは事変り朝に帝都と立ち出でゝ夕に壺嶺の景色とも眺むる明治の御代ぞとふとけれ抑も信夫郡飯坂と唱ふるは福島縣下岩代に在り福島町の北の方二里十町にして午前六時上野の發車に投じなば其日の午後五時にはやすゝと着きぬべし福島縣下は我が日の本にたぐひまれなる鎮泉の數多きに古より其名の世間に聞ゆるもの稀にして只土地の人々の耳にそるのみなりしが明治の御代となりしより東

北鉄道開通しそのみならず車馬の便利さへあれば都の人も部人も行きうふ事のいとしげく蟲籠詣で松島遊びの人々は日々其數と増すなれば自然此地と知る者は必ず杖とひゞくなれどこれとて其名と知り給ふ人のみに過ぎず他は皆知らずして行過し給ふ事のいとおしければ飯坂の名と告げて此の勝景此の佳遊所あると世にしらするにてありき

飯坂の地理

午前六時上野發の滝車あ乘らせ給はゞ午後三時には福島々々と驛夫の叫ぶと聞うせ給はん福島停車場より人力車にて飯坂に向ふときは殆んど一時間にして到着そべし鏡泉は飯坂町あり

飯坂町は東南の方打開けて田畑多く福島に通ふべき道路

ありいと平坦なれば馬車人力車の通行も自由あり西北の方い田畑打ちつゞきて其の終は山多く最高なると太作山と云ふ又鵬城と唱ふる丘陵あり往時佐藤庄司の邸第ありしと云ひつたふ、東北の方い摺上と云へる川と境として東伊達郡湯野村(此村亦鏡泉多く全村鏡泉宿と業とする者多し)と相對す此川に架設せる十綱橋と唱ふる釣橋ありて尤も奇巧と極めしものにして互に相往來す

飯坂は戸數千戸餘にして鏡泉は、摺上川あ臨める所あ多し摺上川は急湍にして岩石起伏仰で天と眺むれば龍虎噴起時に人にせまらんとするが如く伏して水底と望めば急流白波と起して慶瀧々たり山水の風致茲に盡したりと云ふべし一度此地に遊ばゝ歸ると忘るも又宜なる哉川中には

多く魚類と產す其の主なるものと擧ぐれば鮭、鱒、赤鱒、川鹿、鮎、やまへ、イハナ、等にして鮎い其佳味なると以て世に見る、

盛期は六月より十月と盛期とす町は旅舍四十餘戸ありて何れも携帶美なり醫師は元嚴手病院長たりし南部某なる者病室と新築し諸病の治療と加ふるのみならず有名なる醫師多く住そ其他割烹店、寫眞師、呉服店、荒物、小間物店と初めとし飲食店に至るまで不便と感ずる事なし町の東方に當り高樓空中に聳へ管絃の聲洋々として耳底に達するは當地遊廓にして若葉町と稱ふ穀菜魚類等は多く東京又は仙臺より流注し來りて欠乏と告ぐる事なし

氣候は奥羽中稀なる平穩にして夏も酷熱なく冬も嚴寒と知らず暴風雨の如きは殊に稀れなりとそ

鎭泉

鎭泉の涌口は數多あしして隨て泉質と異にす字湯澤と云へるあ在ると透進湯、鯖湖湯となし字十網町にあると波古湯となし瀧の町にあると瀧の湯と云ふ波古湯は摺上川岸にあり乾立たる岩石と開堀して設けたるものなれば風景尤も佳なり其内にて内湯と引けるは瀧の湯の二三戸にして他は皆外湯にして老若男女の別なく共に混浴せり

瀧の湯なる内湯は皆涌口と異にして字赤川にあるものと赤川湯、赤川端湯、金瀧と云ひ字天王寺にあるものと天王寺湯と云ふ概して摺上川岸にあり涌量最も多く風光亦た優雅なり茲に鎭泉の起原と略記それば

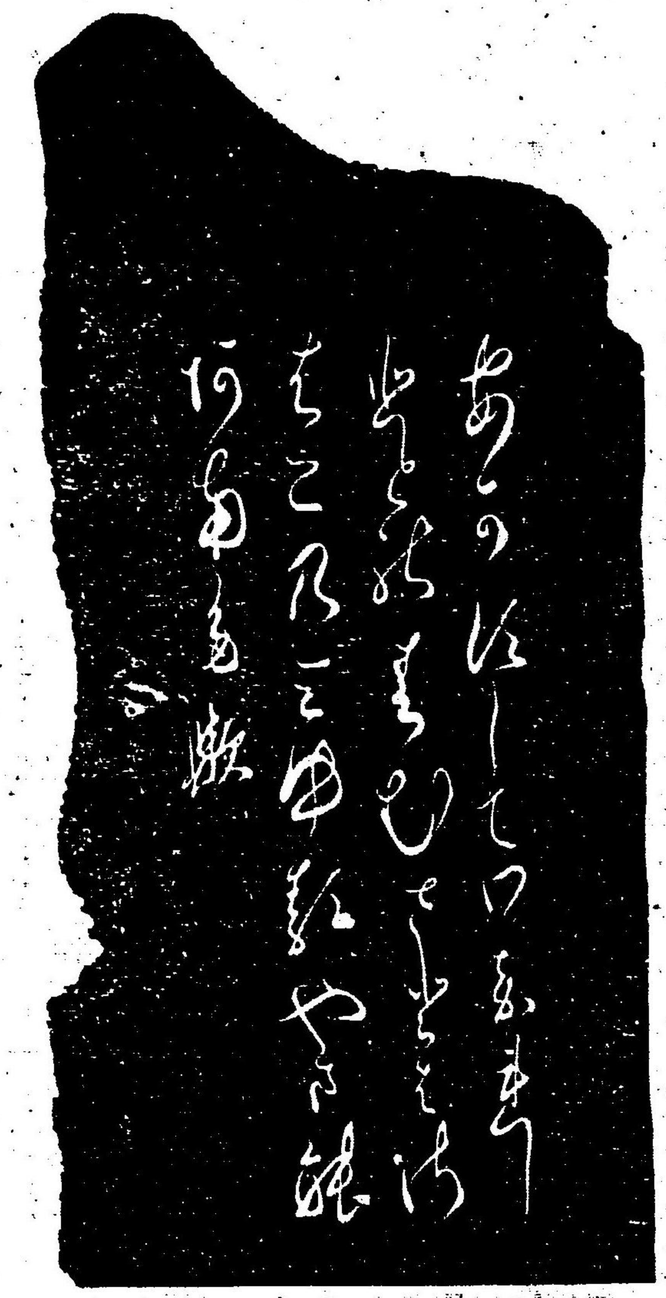
鯖湖湯

世と共あゆげかしき身は陸奥の
さばこの湯といはせてし哉　大納言師氏卿

あがらへて世々にふりぬるうひしあれば
うれし三箱の湯幸ありけり　藤原光友卿

此の二首共に鯖湖と詠せるものなれども未だ其發見年月と詳にそることと能はざるなり古老の云ひ傳ふる處によれば其起原最も古代にして日本武尊東夷征伐として御下向の砌り慈あらせられ此鑛泉に浴し玉ひしに不思議や春の雪の如くに御腦平愈あらせられしより創まり地名を鯖湖と云へるともて取りて其名といなせるなりと泉の東北に

小丘あり琉璃尊と勸請し之を泉佛となす其左側に一小碑あり古歌と刻を書は白川樂翁公なれども讀人は知ると得されども表面に



廣告

一各國諸新聞雜誌賣捌所
右福島市内井に飯坂町五里四方へ毎日配達仕候
福島町本通九丁目　東潤社書店

一各國諸賣藥類　大販賣所
一御香具井にたき香種々
一御化粧もの品々
右福島町井に飯坂外五里四方へは御注文次第配達仕候
福嶋町本通九丁目　長澤商店

あかぎしてわかれしひとのすむさとは
さばとのみゆるやまのあなた歟

其の裏面には

鯖湖碑陰記

土人以古鯖湖即爲此地聞之

老公

老公書賜古歌刻碑樹之臣典謹識其陰詔後世使之知之

文化十三年丙子白河廣瀨典識

（參考）伊達信夫二郡ハ其の富めるより古昔諸侯の之と望むもの多し維新ゐ至るまで凡そ十五六に分區し各其領主と異にし飯坂は其一にして樂翁公之と望まれ久しく白河の屬領となりけり此碑亦此際に設けしものなるべし

瀧の湯

瀧の湯は舊記に發見年月の徴そべきものなし唯花水館の内湯は明治二十年岸邊の岩と崩し砂と排せしに混々として流水出でたるものなりと云ふ

透進の湯と初めとし他泉は發見の年月一ッも詳にすること能はず唯古老の云ひ傳ふると聞くに

其他

赤川湯は文化九年三月佐藤吉右衛門なるもの之と開き赤川端湯は文化九年十一月渡邊武左衛門なるもの之と開き天玉寺湯は文化二年四月藍原源吉、佐藤孫兵衛之と開き金瀧の湯は文化十四年八月橋本平三郎なるもの之と開くと云ふ

泉質

半身不隨、疝痛、慢性痛風、關節痛、服水效

鮒湖湯は脚等に効能あり

透進湯は痛風、脚氣、水腫、神經病、鬱憂病等に効あり

波古湯は腫瘍、頭瘡、疥癬、頑癬、火傷、創傷、打撲

瀧の湯は風濕、痛風、脚氣、水腫、神經病、及び鬱憂病等に効あり

金瀧湯赤川湯及赤川端の湯は關節病、梅毒、疥癬、頭痛、疝痛、等に効ありと云ふ

福島縣衛生課の分析に據れば鐵泉の性狀は無色透明にして微弱の臭氣あり反應い中性なれども殆ど無く極めて微弱の酸性と呈し溫度は其の泉蒸發して濃厚となせば弱アルカリ性と呈し溫度は其の泉源に就て驗するに各泉甚だ高低あり即ち左に擧るが如し

四方ノ御貴顕様方倍々御清適ニ被爲渡奉恭賀候隨テ弊館儀從來當町字湯澤ニ於テ旅舍營業罷在候處四方貴顕様ノ御勸メニ隨ヒ去ル二十年滝ノ町ニ高層ナル地ヲ撰ミ一館ヲ新築シ料理兼旅館營業仕候處四方紳士ノ御引立ニ據リ日々繁榮ニ立至リ候ハ是偏ニ四方貴顕紳士御愛顧ノ賜モノニ據ル處ト只管奉感謝候就テハ右御禮ノ爲ニ自今尙ホ一層料理ノ調進ハ勿論内湯ノ擂造等モ改良致シ益々貴顕様方ノ御意ニ相叶候様注意仕候間何卒倍舊ノ御愛顧ヲ垂レサセラレ不相變御來車御休泊アランコトヲ伏テ奉希上候謹言

飯坂町滝ノ町

花水館主　石堂寛助

名人國碁獨案内

遺跡

二宮秀快先生題字並撰閲　永井忠敬先生撰

定價金廿五錢〇郵便税金四錢

但郵劵用一割增

目錄●碁唱言葉●圍碁心得の事●三十目より三目まで置碁石配り定石古人の評註●二目置碁石配り定石故村瀨勝田兩先生の評●寄手損得圖解●詰碁生死の圖●同劫攻の圖●同追落並に狹の圖●同斷並に續くの圖●近世名人打碁等にして斯道の指針本藝の指敎圖たり

東京市日本橋區通旅町十番地

發行所　書肆　高崎修助

以上の定性試驗は明治十七年二月施行せしものなり

各泉の標準と知らんが爲め明治二十一年二月滝の湯と採

温度	氣温 五度ノ時	結晶湯	透徹湯	波古湯	蘆の湯	赤川湯	赤川端湯	金瀧湯	天王寺湯
		五十二度	五十四度	五十六度	五十五度	四十七度	四十九度	四十二度	五十六度
一リーテル中固形分全量		百二十五度六分	百二十九度二分	百三十二度八分	百三十一度	百十六度六分	百三十度二分	百七度六分	百二十五度六分
		〇、九六	〇、九六	〇、九二	〇、九七	〇、九九	〇、九	〇、八七	〇、九四
									華氏ノ度

硫化水素	痕跡	炭酸瓦斯	少量		
コロール	多量	硫酸	多量		
珪酸	極少量	石灰	中量		
苦土	痕跡	ナトロン	著明		
加里	僅微				

明して定量試驗と行ひしに左の成績を得たり

塩化加里	〇、二九五七	硫酸石灰	〇、二一四		
硫酸那篤留謨	〇、三五九八	炭酸石灰	〇、〇二五		
炭酸麻倆混更謨	〇、〇〇四二	炭酸那篤留謨	〇、〇〇二二		
珪酸	〇、〇四二	加里	痕跡		
硫化水素	痕跡				
合計			〇、九六六七	〇、〇八	
遊離及牢化合炭酸					

（以上試驗福島縣鐵泉誌に據る）

春

春の氣候は何れに行くとして佳ならざる所なし、就中飯坂の如きい三月下旬より四方の山々霞と罩め、雲と吐き樹は綠葉の新衣と着け、風い爽々として袂と吹く其の佳景云ふ可らず摺上川の水は碧にして伊達の山い蒼く櫻花其半蕾に咲き列ね旅舍各樓上より之と眺むれば名にしおふ芳野向島も亦之に過ぎじ梅花桃樹村内に散植し春ゐ至れば恰も是れ一個の武陵なりとや云はん鐵泉に浴して一酌と恋にじ坐らにして之と眺むるも佳なり美人と携へ梅と桑園の間に訪ひ櫻桃百花と河岸に賞する又快ゐらずや

夏

飯野は山多く樹木繁茂を然れば夏日日正に亭午になんとし人亦熱に苦しむゐ際しては山神俄に雲煙と繰り涼風一揚雨之に伴ひ白練の如くに下り或は急矢の如くに横射す而して遠山には日赫々として一滴の雨あるなし前樹に

日ありて後嶺に雨あり後嶺に日ありて前嶺に雨あり右嶺は降り左嶺は照る其奇なる抽き筆にて記し難し之と以て熱暑直ちに排斥せられ精神忽ち爽快となり涼風腋下に生じ人として思はず歸るを忘れしむ蓋し飯坂特有の風景と

も若し其れ雨なく風非されば摺上川に入りて水浴するも亦興味多し川は谷水にして清冽玉川に比すべし河身紆曲する所急湍之に當りて激し奔流之に觸れて怒り鬱々として聲あり沼々として音あり數万の佳魚相集りて遊泳之と捕ふるも亦一興なり

夜に入りては十綱橋の橋上に納涼する亦佳なり古歌あり曰く陸奥の十綱の橋にくる縄はたべずも人に云ひわたせ

うな(架橋の起原に就きては特筆せざはしき美談あれど茲には省きぬ)飯坂湯野の人々は老若男女出來りて涼と橋上に食る者多く橋の左右に露店氷り〳〵と呼はり懸くる軒頭の燈火は水に映じて爛々たり(此邊に氷あし冬間雪と固ひて夏に至りて之と販ぐ左れど雪〳〵と云はずして氷〳〵と云ふ本宮宿以東に氷あることなし然るに明治二十一年雪の有毒あると發見し發賣禁止せられ今は精良なる氷と他よりわふぐなり)又菓實と販ぐ老爺あれば節ふうしげあ相馬節と歌ふ少郎あり其の眼はしきこと實に山間に見るべうらざるはなにてありき

秋　冬

湯の湯に入浴するものは先づ前面に一の山と見るあるべ

し此山は春は櫻花あり夏は種々の草花あり秋は楓樹の紅と呈し冬は枯林に雪と皚ひ時あらぬ花と見るて〻四季の觀とぞ備へたり凡そ世間の勝景は春の花、秋の月、冬の雪、何れのそれなるに飯坂のみは此山あるとして四時の景に欠くる所なし樹々に錦と呈するの頃茂庭道と行通ふ人馬と見るに畫が如く恰も一雙の屏風の如く其の奇觀亦盡しがたし況して馬夫の鄙びたる歌なぞ唄ふと聞かば婉として身は高天氏の古へにあるやと疑はる此等の景興實見の人ならではよも實とはすまじ

名所舊跡

〔伊達、信夫の間〕名所舊跡尤も多のり尚古の人として懷舊の涙と下さしむ左れと或は牽强附會に出でたるもの又なきにしもあらざるべし今其の名所舊跡の大概と事て浴客運動の栞ともがなと二三と記せば

瑠璃光山醫王寺の什物

飯坂より七八町許り福島の方に戻れば五郎兵衛館と呼ぶ坂道ありて人家數戸たち並べり此處より右に折れて二三町行けば最も古びたる寺門と見ん此寺と醫王寺と云ひ瑠璃光山と稱せ今と距る百五十餘年以前に著述せられたる信達風土記てふ書に記して曰く

沂洄摺上川。十餘里而有温泉。謂斯處於飯坂也、是元歴之古佐藤庄司治信及嗣信忠信居城。而擔櫓並甍。魚虎輝譖。旋蠹九重而離群連山。年月崩烈。今也爲民居。田園菜菓。自爲閭枠石磴苔滑。井蟶喧皐。南庭櫻花。不忘昏曙陰山紅楓。秋暮繡錦

矣。南田ニ於浅小川ニ而有ニ藤氏之親族之墳墓石塔等ニ也此寺號瑠璃光山醫王寺ニ也。義經之笈。辨慶之筆跡大般若經。及藤氏之短刀等。有ニ此聞者ニ而歴然五百年之爲ニ記念ニ也

まことや今に至るまで此等の什物あり著者の曾て一見したる所と記せバ義經の笈と云へるは銅と臺として金もて滅金したるものなりしが其製密あらねども左まで拙劣にもあらず辨慶の筆と云へる大般若經は紺地に金泥の楷書もて最と綺紆に書きなせり又同じ筆もて下馬の二字と書き付たる板あり嗣信忠信幼時の玩弄品として鉄器と覺ゑき鳥形なるものあり佐藤家にて用ひしとて堆朱の椀類二三種あり將た又本堂に至れば佐藤治信(治信と云ひ基治と云ふ何れが是なると知らず醫王寺の位牌には勝信と記せり)夫婦の位牌及び嗣信忠信の位牌あり庭には義經の手植と大なる松あり墓地にハ佐藤家の墓あり聞く此等に緣記ありと著者は之と見ざりしぞ遺恨あれ

佐藤庄司は飯坂より四五里餘りへだてたる石名坂てふ地にて終れりと見も東鑑ハ曰く

元治五年八月泰衡が郎從信夫の佐藤庄司は叔父阿逸太郎高經伊賀目の七郎高重と引具し石名阪の上に陣と取る云々

(參考) 石名坂も亦信夫郡に在り福島と距る一里餘り伏拜村てふ所にあり著者曾て之と訪ふ二基の碑あり信夫郡長柴山景綱氏の建る所曾て此地と堀りて古武器と得たり記錄と推して庄司戰死の地なると察し碑と剥みし

と云ふ

先づ己れ陣所の前には大堀とはらせ逢隈川の水とせき入れ柵と引き石弓と張つて討手の向ふと相待たり此手へは常陸の入道念西が子に常陸の冠者爲宗、同次郎爲重同三郎資綱、同四郎爲家兄弟四人窃に手勢と引卒し様の内より伊達郡澤原の邊にすゝみ出で先陣として大の流鏑と射うけたり佐藤庄司以下のもの共此の由と聞てあに先陣とはいはせもたてじと一度にどつとおめいて馳け出で命と塵芥よりも輕くして禦ぎ戰ひける間爲重資綱爲家は數ヶ所の疵と蒙りて進み得ず兄爲宗は是と見ながらちつとも未練の氣色なく縱さま横さま十文字にいきともつのせづ攻めける程に佐藤庄司以下むねとの兵

十八人一所に爰にて討れたり爲宗兄弟其の首と取り厚樫山の上經が岡にぞさらしける

（參考）伊賀良目七郎とは今の五十邊村の創めならん歟、伊達郡澤原の邊とは今の信夫郡西山の下、佐原村ならんか、石名坂の陣の前に大堀とはらせ逢隈川の水とせき入れとは今の永井川ならんか、此川は水上なく深き川にて逢隈川に近し、

芭蕉桃青翁が奥の細道に云ふ

月の輪の渡りと越て瀬ノ上といふ宿を出る佐藤庄司が舊跡は左の山際一里許りあり飯坂の郷さばのと聞て尋ね行くに丸山といふ尋ね當る是れ佐藤庄司が舊跡あり麓に大手の跡など人の教ゆるにまかせて涙とおと

しぬ又髣髴ちに一雙の石碑と殘る中にも二人の娘が去るしわれなり、女なれどもうひ〳〵しく名の世に聞へつるもの哉と袂とぬらしぬ　はせを

笈も刀も五月に飾れ紙小旗　法橋維舟

古人の誹歌あり左に　長崎花明

佐藤そゞしまる山一ッそびへたり

ふるてらやひよ鳥の聲ひいよ〳〵　桃淵

蟬ふけてありあけこぼる芭蕉うゑ

飯坂溫泉雜詩五首　南部曉煙

老來厭煩熱。買屋入仙鄉。醉臥高樓上。溪聲入夢涼。

又　同

逐涼座深夜。溪閣月輪昇。飛瀑亂人語。家童呼不應。

又　同

爲有烟霞疾。浴來獨養神。柴門

人不到。日與白雲親。

又　同

水閣避炎熱。午眠酒半醒。晚來似無夏。過雨暮山青。

又　同

山秀水清處。迎君舉酒杯。醉凭欄杆立。嵐翠入樓來。

飯阪溫泉雜詩五首　南摩羽峯

高樓枕石瀨。自在人間外。半夜添幽寂。溪聲入夢大。

又　同

溪聲近孤枕。山翠滴茅檐。恐隔歸雲宿。高樓不下簾。

又　同

山色淡如遠。水聲送夜涼。風欄人倚盡。溪月照魚梁。

又

置身人世外。蕭寂忘行藏。凭欄

啞然笑。白雲吞吐忙。

同

又

靈泉湧鬱沸。澄徹明於鏡。克資

岐軒功。洗成人正命。

飯坂温泉四季の友終

廣告

私共儀從來温泉宿屋營業罷在候處過般東北鉄道開通後ハ東都ノ諸君様ニモ奥州松島、鹽釜御見物等ノ御序ヲ以テ御ヲ枉ケサセラレ殆ト從來ニ百倍シ營業繁昌ニ立至リ候段奉鳴謝候隨テ今般我々共一同申合セ百事改良一層信切懇篤ヲ旨トシ御食料及臥具ニ至ル迄專ラ注意致シ彌ヨ々々四方諸君様方ノ御意ニ相叶ヒ候様勉强仕候間何卒各位様被仰合不相變御來車御休伯被仰付被下度此段一同伏シテ奉希上候敬白

倘々　福島停車場ヨリ當飯坂迄僅ニ貳里余ニ有之同所ヨリ時間馬車毎日數回往復仕居候

飯坂町字湯澤

和久屋　佐藤ムメ

誘引屋　同所　佐藤仁兵衛

桝屋　同所　牛田太五右衛門

堀江屋　同所　堀江政藏

網屋　同所　渡邊長太郎

花水館　飯坂町字瀧ノ町　石堂寛助

角屋　同所　中山辰五郎

升屋　同所　片岡トジ

堀江屋　同所　堀江常右衛門

高松屋　同所　八卷宇吉

きう病さんぜんさんご大妙薬
官許 養神湯ふり出し
七日分入
金四拾錢
各國有名賣藥取次大販賣所

養神湯本舗　養壽堂　岩代信夫郡飯坂町字湯澤二番地　白田新助

名菓子製造和洋砂糖類大販賣店
松月堂　米澤屋　岩代信夫郡飯坂町字湯澤十五番地　齋藤寅次郎

衛生割烹
精々注意御手輕
專一ニ勉强仕候
客間改造仕候ニ付大勢樣の御集會にも差閊無之候
福島町十二丁目
稻荷小公園眞向へ
皆宜樓　敬白

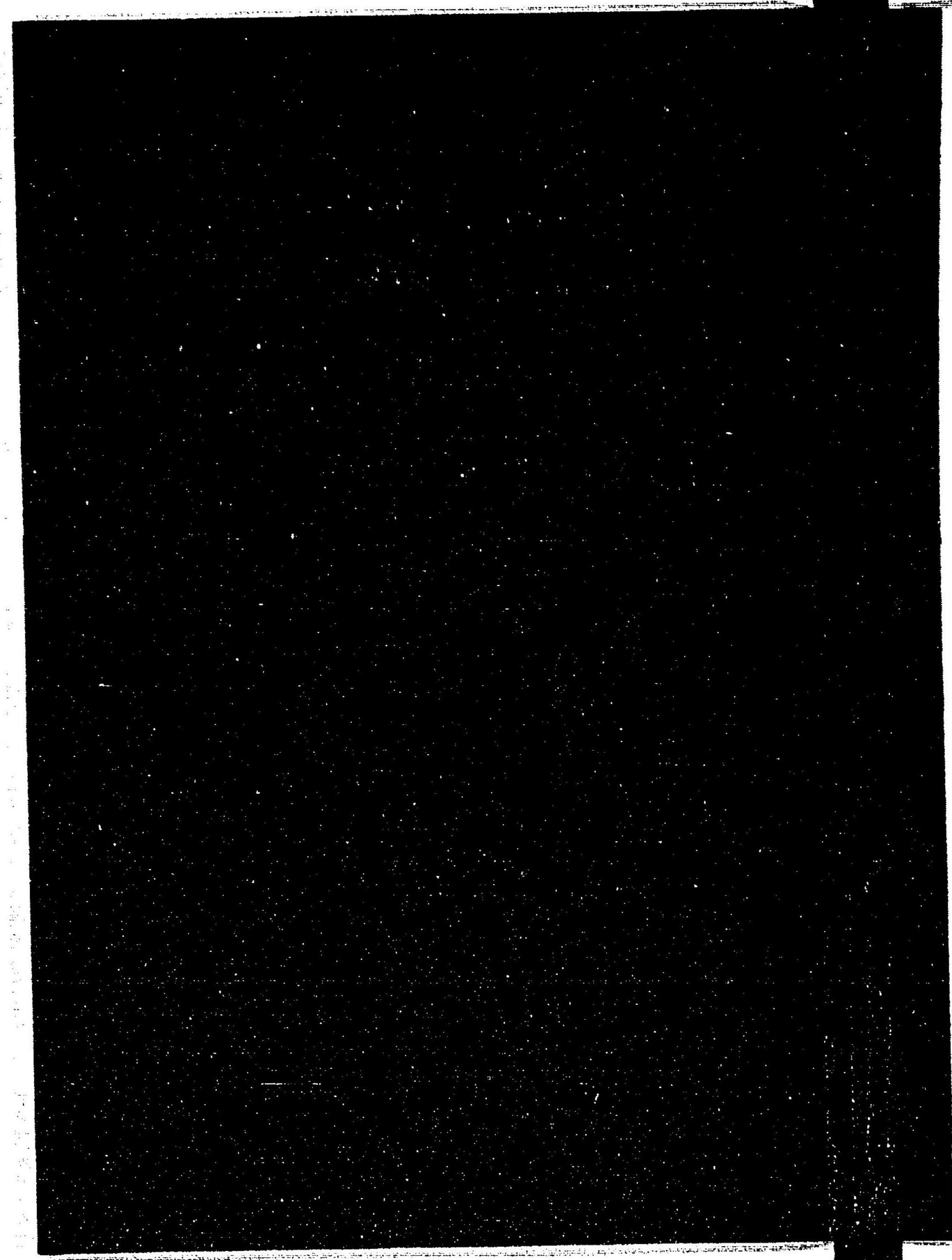
明治二十二年九月二十八日印刷
明治二十二年十月　日出版

定價金六錢

著作者　福島縣信夫郡福島町九丁目廿七番地　長澤廣吉
發行者　福島縣信夫郡福島町九丁目廿一番地　齋藤忍
印刷者　東京市本郷區湯島一丁目十三番地　松本秋齋
發行所　福島縣信夫郡福島町九丁目　東潤社

版權登錄

版權所有



飯坂温泉四季之友

長澤廣吉

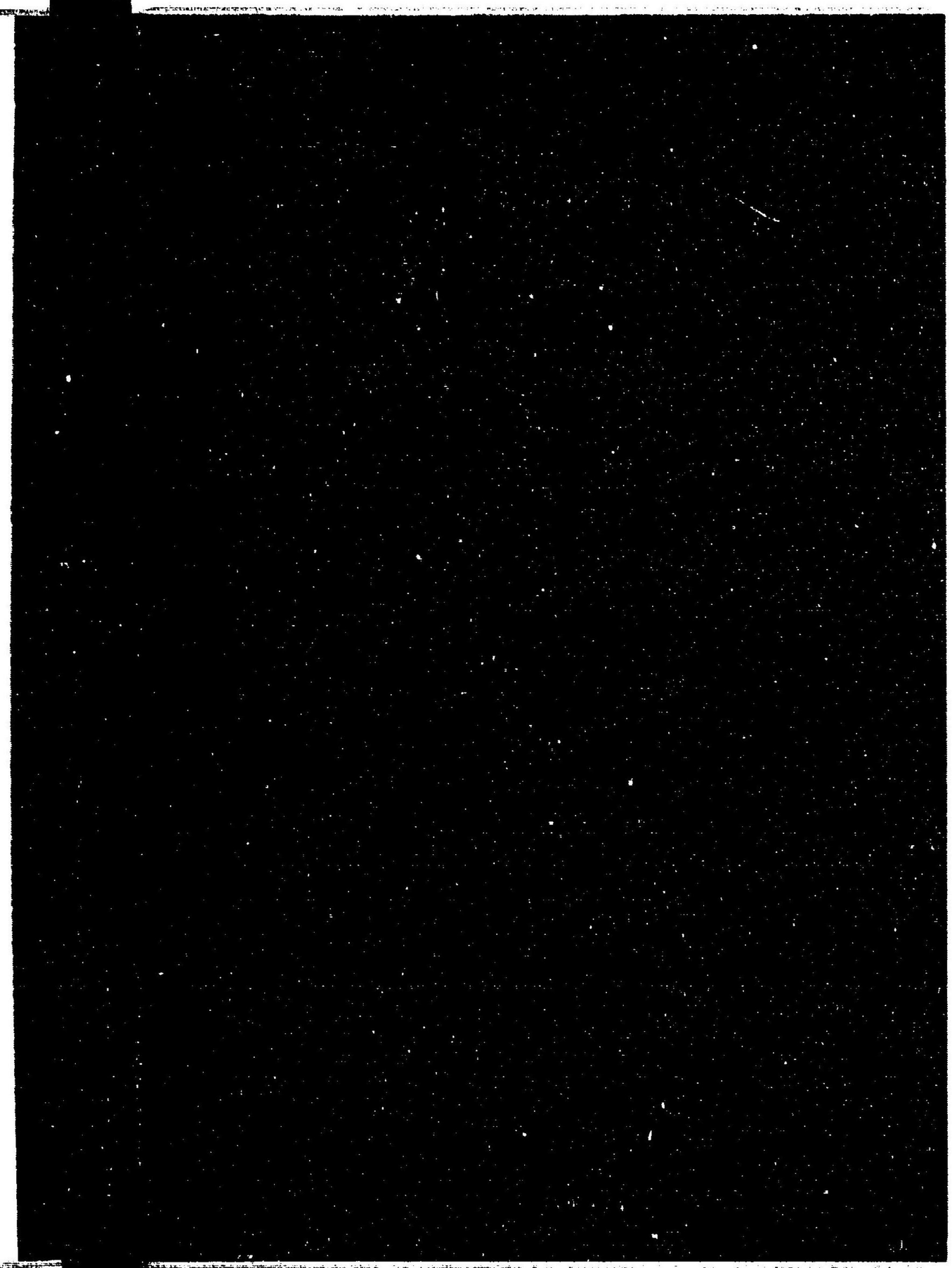
国立国会図書館

023332-000-1

特49-347

飯坂温泉四季之友

長沢　広吉（駿江）／著

M22

ADC-0220